GSⅢ　フィリピン　セブ

現地渡航期間　２０２３年２月１１日～３月５日　　計　14名

テーマ：世界に広げる日本の「安全・安心」：より良い生活環境の構築を目指す教育支援

グローバルスタディⅢ　フィリピンセブ　目的

・都市と地方の経済格差お実態と貧困を助長するメカニズムについて、教育・福祉的観点から理解する。
・山間部のコミュニティにおける安全・安心な暮らしに資する貢献可能性を考えていく
①フィリピン・セブ島の貧困と格差が、グローバル化とどのように関連しているのか説明できる。
②それら環境における安全・安心な暮らしのための、実現可能な貢献のあり方を示すことができる。
③グローバル社会を生きていくために必要な力を検討し、自分自身の取り組みと貢献のあり方について表明できる

学習の流れ

Hop
理解する

Step
実践する

Jump
発展させる

事前学習

まず、オンライン学習としてフィリピンについて知るために、動画を見てセブ島の文化などの知識を学んだ。事前学習で日本と海外の文化や価値観の違いや貧困問題について学び、持続可能な社会実現に向けての模索した。小学校の授業内容の構成を作っていく際に私たちが授業をすることによって、現地の子どもたちに何を伝えることができるかについて意識を置き、話し合った。また、現地に寄付できる服などの収集を行いフィリピンに行く準備を行った。

Hop：理解する

【ゴミ山】
車からゴミ山で生活している人の様子を見ることができた。
ゴミ山では生活している３倍ほどの人たちが生活していた。





【墓地で暮らす人々】
フィリピンの墓は貧富の差が歴然であった。非常に立派な墓もあれば、コインロッカーほどのサイズの墓もあり、その墓の上や近くに住んでいる墓守の人々と出会った。フィリピン人の多くは、キリスト教で土葬で遺体を埋葬する文化がある。驚いたのが墓の上などに洗濯物などが干してあったことだ。墓で育ち墓で生涯を終える。そんな人々もいることを現地に訪れて知った。

【UPセブ大学】
セブ大学の教授より、島について教えてもらい、学生に質問をしたりキャンパスツアーをしていただいた。

【SOM校】
中高一貫の寄宿学校、SOM校を訪問した。貧しい家庭で育ち、学習意欲があると認められた子供だけが入学できる。学校内を案内してもらいながら、生徒や先生と交流し普段の学校生活などについて教えてもらった。

【スラム街】
スラム街は想定していた以上に臭いが凄まじい。スラム街の人々の人情は、非常にフレンドリーだった。しかし、韓国人か中国人と嫌な顔されて聞かれることが多く、中指も立てられたりしたが、我々が日本人だと知ると険悪な空気が一変し、ウェルカムという態度になった。スラム街のこども達はスマホを持っていたりアーケードゲームをしたりしていた。現地の人は、温かく手を振ってくれた。闘鶏が人気らしくペットとしてではなく、ギャンブルの1つとして鶏を飼っている人もいた。

Step：実践する

模擬授業　　**活動内容：現地の小学校での衛生教育に関する模擬授業**

A班



・歯磨きの大切さ
・日本のおもちゃ

B班



・日本の四季
・ろ過器
・リトマス紙を使用した理科の実験

C班



・日本とフィリピンの食文化の違い
・お箸
・衛生教育について

授業の様子の動画

授業を通して気づいたこと
こどもたちがはじめて経験することは、写真や実験などを通して興味を持ってもらえることができた。
簡単な英単語を身振り手振りを交えてコミュニケーションを取る方が子どもたちもこちらを向いてくれるし、反応も良かった。
一方的な授業よりもアクティブラーニングを取り入れた方が、子どもたちの反応が良かった。

授業の反省点
子どもたちが実験に成功したときに、一緒に喜ぶ言葉のレパートリーが少なかった。
低学年と高学年の年齢に合った授業を構成するのが難しく、学びを発展させていくストーリー作りが難しかった。

フードフィーディング

活動内容：関西国際大学の学生が現地の子どもたちに現地の好みの味に合わせて給食を作る。






気づき：日本の子どもたちは、親やきょうだいに何でもしてもらうことが当たり前の環境で育っている。フィリピンの子どもたちは、日本の子どもに比べて、自主的に手伝いをしており自立していることを体感することができた。
配膳の場面では、低学年の小学生たちが列に並び、高学年の小学生が列に並ばずにただ見ているだけの子どもが多くいた。声掛けをしても、年下の子どもに渡してあげるようにしているようだった。それもフィリピンの文化であり、自分たちは食べなくても良いから自分より年下の子どもに食べて欲しいと我慢して、年下の子どもが先に食べるようにする子どもが多くいた。

課題：食事を配膳していると、既に並んでいる子どもの列に割り込んで並んでいる子どもがいることに気づいた。私たちは、割り込みをした子どもに対して後ろに並ぶように注意をした。炊き出し活動後のミーティングではこの「割り込み行動」に関して問題として話し合った。私たちの結論としては、並ぶ場面ではしっかりとルールに従って後ろに並ぶべきであると考えが、これはあくまで日本での基本的なルールである。しかし、活動しているのはフィリピンであり、日本の文化やルールは関係ない。知らず知らずのうちに日本の文化が「正しい」と考え、価値観を押し付けていたかもしれない。フィリピンでは、地域によって規則正しく後ろに並ばなければならないというルールはまだ十分に浸透していない。私は無意識に日本の価値観を当てはめて考えることが多々あった。この経験を通して多様性の尊重のあり方に気づくことができた。

プロジェクト：フィーディングと授業を並行に現地の高校生と持続可能に繋がるものを製作する

作成したもの：ゴミ箱

製作中の様子の動画QR





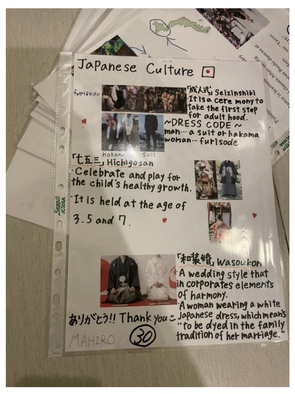

作成した背景：これまでの活動を通して、フィリピンの街並みや小学校などを見て感じたことは、ゴミのポイ捨てがフィリピンでは当たり前で、多くのごみが小学校にも街中にも落ちていた。ガース村では観光資源としてフラワーガーデンがあり、将来、観光地客を呼び込みたいと考えていた。しかし、ごみが多いことは大きな問題であると学生たちは話していた。そこで、日本では公共の施設には必ず複数のゴミ箱があることを紹介し、村に分別ごみ箱を新たに設定することを提案し協働で製作することになった。

課題：取り組みの一つとして小学校のみんなとゴミ拾いを行った。しかし、子どもたちにどうして捨ててはいけないのかまでは、伝えることができなかった。一時的にはきれいにはなったが、次の日にはゴミが落ちていた。習慣づいた行動変容には、計画的かつ継続的に取り組んでいく必要があることに気づくことができた。
バディとは、ジェスチャーを交えながらコミュニケーションを取っていった。しかし、作業工程や具体的な作業分担を相談する際には、各々の母国語で進めてしまったことで相互に会話に入ることができず、コミュニケーションを取る機会を減らしてしまった。

Jump：発展させる

「図書館づくりへの第一歩～日本図鑑～」

完成した内容の動画QR





ふたつのきっかけ

一つ目は、子どもが日本に関する古びたガイドブックを見せてくれたことだ。叔父さんからもらった日本について書かれている本を持ってきてくれて、私たちに見せてくれた。その時に日本の言葉や文化について質問してくれた。

二つ目は、当初からバディは村に図書館が欲しいと言っていたことだ。　プロジェクトを計画するときにどんなものを作るか意見を出し合っている時に、ある一人のバディが図書館が欲しいと話していたが、短期間で作成することができないと決めつけてしまい、その話を深堀することができなかった。「なぜ図書館をつくりたいのか」を聞くことができず心残りだったため、最終日間近にバディに「どうして図書館が頭に浮かんだのか」を聞くと、「村の人は本に触れる機会がなく、読み書きが苦手な人が多く本に触れる機会を作りたかった。」と話してくれた。そこで、残された時間で自分たちに何ができるかを考えた時に、将来的にこの村に図書館をつくれたらいいなという考えにたどり着いた。日本とフィリピンを繋ぐ第一歩として、現地のコーディネーターの方に協力してもらいながら、日本に関するものが書いてある図鑑を作成することにした。
その結果、小学校の校長先生も図鑑を受け取ると喜んでくれ、図書館の話も賛同してくれた。今回この活動をしたことにより、将来図書館をつくるための第一歩になったのではないかと思う。しかし、作るためには様々な課題が残されているため、その課題と向き合いながら実現に向けて行動していきたい。



図書館プロジェクトについてのお願い

・英語で書かれている本を集めています。
・図書館づくりに向けてのクラウドファンディング（実施予定）
ご協力よろしくお願いします。



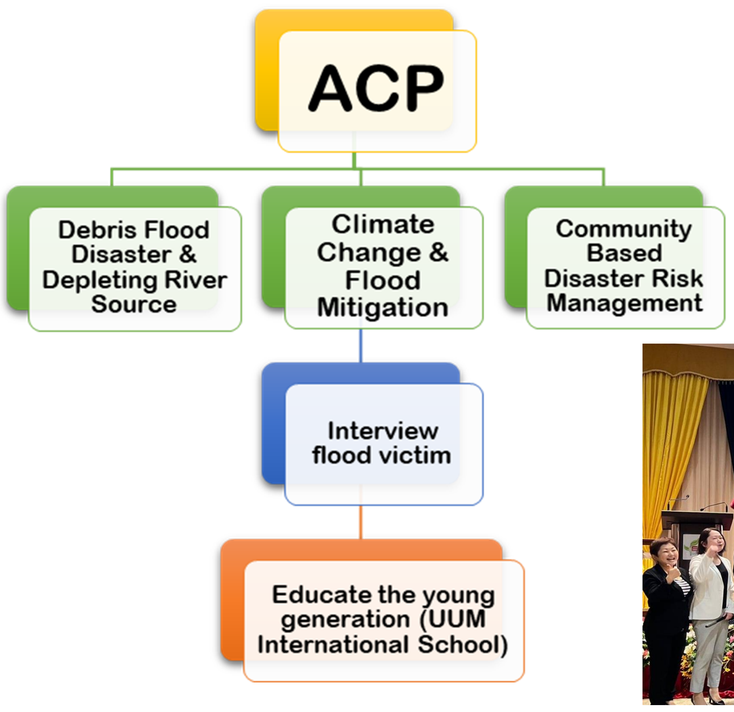
担当教員：村田 昌彦　川脇 康生　田中 綾子

マレーシアにおける気候変動・減災対策フィールドワークと防災教育の実践

【趣旨】

- 多国籍の学生との共同リサーチ・グループワーク
- 防災教育の出前授業(UUMインターナショナルスクール)
- 災害被災地訪問、被災者インタビュー(ヤン川)
- アジアの共通課題：気候変動・災害多発
- 自然災害への備え
- 首都圏の洪水対策





Day	Study Plan
1日目	関空出発→アロースター空港着→UUM到着
2日目	講義1（気候変動等について）
3日目	講義2（土石流災害と洪水対策）英語学習
4日目	講義3（コミュニティ防災）
	講義4（データ収集方法）、文化交流会
5日目	現地調査の事前説明、グループ別準備
6日目	現地調査1（ヤン川被災地でのヒアリング）
7日目	現地調査2（ペナンヒル等での環境調査）
8日目	現地小学校（UUM IS）での防災教育実践
9日目	プレゼン準備、 グループプレゼン発表
10日目	ACP会議で発表、 交流会
11日目	UUMからクアラルンプールへ移動
12日目	都市の洪水対策（スマートトンネル調査）
14日目	クアラルンプール出発，　15日目,帰国





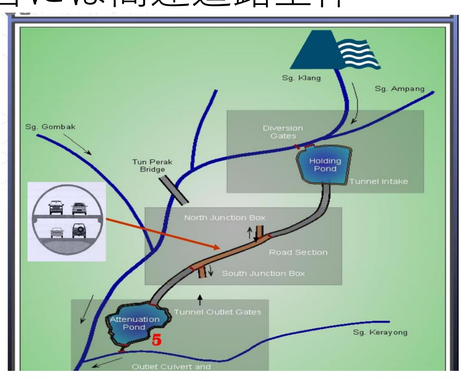


SMART Tunnel

Stormwater Management and Road Tunnel

・気候変動により頻発する首都圏の洪水軽減と交通の円滑化を合わせた世界唯一の3階層多目的トンネル(水路+高速道路)
・豪雨によって雨水排水が必要になった場合には高速道路全体を排水路として活用する

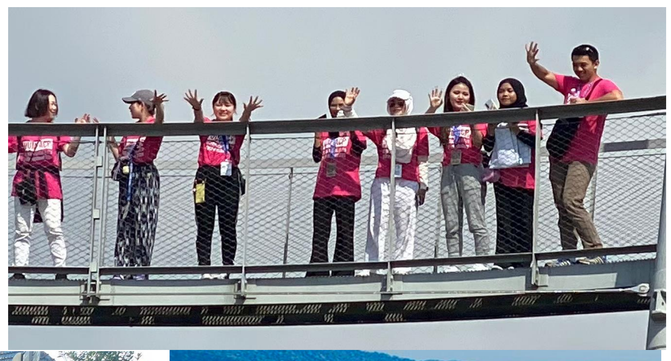






Penang Hill

ユネスコ生物圏保護区
・都市と自然の融合
・多様な生物の生息地である
・マレーシア最後の海岸雨林







Lecture

1.Debris Flood Disaster and Depleting River Sources
USMにおけるバイオエコシステムの取り組み

2.Climate Change & Flood Mitigation
気候変動の影響について

3.Community Based Disaster Risk Management
コミュニティ防災とコミュニティにおける防災ワークショップ手法

4.UNESCO Water Women Camp
ユネスコ 水・女性ワークショップ









Exchange





防災教材制作ミーティング





GALA Dinnerで民族衣装披露



伝統的なダンスに挑戦



マレーシア最大のモスク訪問

＜メンバーリスト＞

加藤千翔、櫻井　愛、高岡　麗、大西文也、澤田和日子、三村　暉、松葉　潤、楠　莉々夏

DRR Fieldwork at Yan Community

鉄砲水の被害にあったヤン川で被災者にインタビュー





インタビュー概要

対象者：自営業、シングルマザー、高齢者、バイク整備業、リゾートオーナー
- UUMの学生が通訳、院生がガイドし、役割を分担した
- 災害時の対応、災害前の備えなどを質問





インタビューで分かったこと

- 若者発信によりコミュニティが強くなっている
- コミュニティは強かったものの災害への対策ができておらず被害が出た
- 政府、NGOから財政的、必需品の提供などさまざまな支援がなされていた
- 次の災害に備えるためプログラムへ参加するなど学びを行っている
- 日本と同様に都市部ではコミュニティのつながりが薄く、郊外とくに田舎ではコミュニティが強く形成されている

DRR Education at UUM International School

全６グループが約15分間ずつ授業を行った







グループ１：気候変動実験と防災すごろく
- 氷を溶かして地球温暖化・海面上昇の実験
- クイズに答えて防災すごろくでゴール目指す







グループ２：防災かるた
- 災害別にどう備えるか考えるかるた
- 正解すると景品ゲット

グループ３：防災サバイバルゲーム
- 問題を引き正答で前に進む
- 最初に避難所についた人が勝利





グループ４：マレーシア災害旅行ゲーム
- クイズに答えて正解すると次の都市に進める
- 間違えた場合は避難所へ行く

グループ５：ACPショッピングセンター
- 防災クイズに答えてお金をゲット
- 防災グッズを30秒以内にショッピング
- 選んだ理由を発表

グループ６：防災リュックをつくろう
- 時間内に防災グッズをリュックに詰める
- 事前の備えの重要性を理解してもらう

〈授業を通して〉
- 日本と比較すると、マレーシアでは防災教育はあまり行われていないと感じた。
- 子どもたちが楽しみながら取り組むことのできる活動を行い、防災についての知識を深めてもらうことができた。

Conclusion

【プログラムを通じて得たもの】
- **日本では学校や日常生活の中で防災を意識する機会が多いが、海外では機会が少なく防災意識の違いを感じた**
- **同じような興味・目標に向かって活動に取り組む中で、コミュニケーションを取ることができ海外で友達を作ることができた**
- **コミュニケーションを取ることの楽しさに気づき、自分から積極的に行動できるようになった**
- 昼食時やバス内での会話などプログラム外での交流の積み重ねにより、プログラムをスムーズに進めることができた
- **伝えようという思いがあれば伝えることができるとわかり、心の地図から境界線が消えてなくなった**
- **文化･価値観の違いを体感して、多様性の理解が深まった**
  海外の学生は日本の文化に関心があるなど積極的に受け入れようとしてくれた
  イスラム教の教えによるお祈り・服装・食べ物など
  時間に縛られず、自分らしさを持ってのびのびと暮らしている

【これからに向けて】
- 「活動した」ということで終わらせるのではなく、次に繋げていくために何をすべきか
- 防災への意識が低い人に対してどう意識づけをしていけるか
- 防災技術など得たものをどう活かすか



ACP議長（学長）から最優秀賞、準優秀賞授与

グローバルスタディⅡカンボジア

カンボジアの現状と教育の課題　ーカンボジアの歴史をたどってー

1. プログラムの概要

カンボジアは内戦以降、目覚ましい経済成長が進んでいる。しかしその一方、様々な側面でその影響を及ぼしている。

例えば、都心部以外では絶対的貧困が蔓延しており、生活の維持が困難な状況にある。都心部内でも格差が広がり、路上で生活している人々が多数存在する。子どもに目を向ければ、親の状況によって義務教育から離脱せざるを得ない状況にあり、教育の機会が剥奪されていることが問題視されている。

この状況に鑑み、本活動では、学生が小学校を訪問し、十分に登校できなかったり、学習が遅れていたりする子どもを対象にした学習支援を展開し、子どもが安全・安心に教育を受ける機会を保障することに貢献することがねらいとなる。

学習支援を通して、歴史的背景と教育への影響を関連付け、子どもの実態に合わせた効果的なプログラムを検討する能力の獲得をめざす。（シラバス参照）

2. 事前学習

【教育制度】

◎歴史的背景

1975年からの3年間、ポル・ポト政権下にあったカンボジアでは、多くの人々が殺害された。特に教師や医師を含む知識階級は反乱の恐れがあるとして虐殺され、学校制度そのものが廃止された。

◎教育制度

カンボジアの教育制度は日本と同じく6・3・3制であり、初等教育および前期中等教育の9年間を基礎教育としている。小学校では午前・午後の2部制をとっている学校が多く、児童・生徒数に対して教員数はかなり不足している。

【授業準備】

・学年に応じた授業内容の設定
・教材研究　・模擬授業

3. 現地活動と活動を通した気づき

現地活動の流れ

トゥールスレン博物館 キリングフィールド → 小学校での教育活動 → 活動の振り返り

【トゥールスレン博物館・キリングフィールド】

トゥールスレン博物館では、実際に拷問された人々がどのように時間を過ごしていたかを訪問から学ぶことができた。どのような拷問が行われていたかを知り、どのような環境で行われているかを見ることができた。同じくキリングフィールドでは、大量虐殺が行われた場所を訪問した。跡地として私たちが観察することができた。

【小学校担当クラスの報告】

私たちのグループは、7－8歳頃だと思われる子どもを指導した。カンボジアでは学校に通うようになり2年目になる年齢の子どもたちである。授業に参加する子どもたちの人数は日によって変わり、少ない日は18人、多い日は28人ほどの子どもたちが授業に参加した。集団での活動にあまり慣れていない様子だった。また、子どもの中には自身の名前を書くことができない子がいた。しかしそれぞれの授業に対する積極性は高く、意欲的に参加する姿が見られた。

～体育～

◎子どもの様子と環境

グラウンドが整備されていない状況と児童が裸足やサンダルなどを使用することが日常であった。外の気温は暑く、1日目の体育では「外が暑すぎるから、教室に戻りたい」という子どもの意見から教室での授業に変更した。



◎活動内容

子どもの年齢が低いため、授業の集中度が低下すること、暑さに対する体調管理が難しいと考え、初日以外の授業は教室での体つくりの運動遊び行った。

1. 大縄とび、鬼ごっこ、だるまさんが転んだ
2. けんけんパー
3. 風船ゲーム

◎活動報告

大縄飛びでは順番に飛ぶと言うことが難しく、大縄飛び自体も難易度が高かったため、けんけんパーを用いて一人ひとり順番に飛ぶことを練習した。また、風船ゲームでは友達と力を合わせながら活動することを学んだ。これらの学習から、同じ教室にいる友だちと楽しみながら運動を行うことができた。

～英語～

◎子どもの様子と環境

カンボジアの初等教育では教科として英語を教えることはなく、英語に触れる機会が少ないため、子どもたちも英語での問いかけに対する反応は少なかった。



◎活動内容

1. How are you?
2. ＡＢＣのうた

◎活動報告

“Hello，How are you ？，I’m～”など英語を使って簡単なあいさつができるようになることを目標として授業を行った。その結果、子どもたちが日常の中で、英語を使ってコミュニケーションをとる場面が増えた。

アルファベットについては、未習であると想定していたが、ほとんどの子どもたちがABCソングを歌うことができていた。しかし、多くの子どもがアルファベットを歌で覚えているだけで、音声と文字を結びつけて理解することはできていなかった。

～清掃活動～



◎子どもの様子と環境

教室にごみを捨てたり、道にごみが落ちていることが日常である。休み時間に食べたお菓子をその日座った机の中においたままにする姿が見られた。子どもたちは教室に入る際裸足であるが、教室の床にゴミを捨てることもあった。

◎活動内容

1時間清掃活動を行った。二つの班に分かれた。教室班はほうきをつかった掃き掃除やぞうきんがけを行った。外掃除の班は袋にゴミを集めた。

◎活動報告

一生懸命ごみを拾っている児童の姿や楽しみながら清掃している児童の様子が見られた。この活動は、「ごみはゴミ箱へ捨てる」という意識や「いつも使っているところを綺麗にする」という習慣を身に付けてほしいという想いから行った。子どもたちが裸足で教室での生活を送るカンボジアには、教室を水拭きすることは向いていないようであった。

【授業活動からの気づき】

カンボジアでの教育活動を通して、子どもたちの学習に対する前向きな姿勢を身近で感じることができた。２０日間のプログラムを通して目の当たりにした環境は、カンボジアという国が経済的に発展途中であることや教育環境の整備ができていない状況であった。子どもたちから見て取れる経済格差や学習格差があった。そのような課題の原因は、子どもたちが学習したくてもできない環境や、安心して学校に通うことができる制度がないことに繋がると考えた。このような課題に対してはその日限りの支援では解決ができず、継続的な関わりが必要である。

4. まとめ・今後の課題

①言葉の対応について

授業中の集中力を継続させるためにゲームを取り入れることを積極的に行った。ゲームを通して子どもたちが子どもたち同士で学んだり、協力して課題に取り組む姿を見ることができた。私たちは英語で大学生と関わるだけでなく、私たちがクメール語を学び知ることによって子どもたちや大学生とも言葉で関わることが出来た。一番子どもたちと距離を縮めたと感じるのは名前を覚えて、積極的に呼ぶことである。座席表を作り、意識的に名前を覚えた。

②教育格差と経済格差の現状

子どもごとに家庭環境が異なっているため、家庭の事情で学校に行くことが出来ない子どもがいたり、文房具を揃えることが出来ない子どもがいたりと差があった。文字や数字を思うように書けない子どももいた。このような課題に対してはその日限りの支援では解決ができず、継続的な関わりが必要であり、今後の課題である。

③衛生面のことについて

教室の机の中にゴミが入っていたり、教室の外にゴミが散らかっていたりという現状があった。カンボジアでの衛生に対する考えと、日本での衛生に対する考えは異なるが、子どもが安心して学校で学習できる環境を作るためには衛生に関する時間も教育の中に作るべきだと考えた。

グローバルスタディⅠ（台湾）
保健医療学部　看護学科



4年：河野志穂　原田花凛　枚田栞奈　山根咲良　吉川愛香

目的：

台湾の保健医療制度や看護教育の制度が日本とどのように異なるか理解すると共に、それぞれの歴史的背景や国際社会での立場による影響を考える。また、アジア大学の学生とディスカッションをし、より良いヘルスケアのあり方を考察する。

学習目標：

1）日本の文化、保健医療制度、看護教育制度を自主的に調べ、英語でプレゼンテーションすることができる。
2）日本の看護の理念を英語でプレゼンテーションすることができる。
3）台湾の保健医療制度、看護教育制度を理解するとともに、台湾における看護の実践例を学び、日本との共通点/相違点と見出して説明できる。
4）グローバルな視点から看護実践がSDGsの貢献にいかに関連しているか考察し自分の意見を明確にして発信することができる。
5）英語力を向上させ、英語による講義を理解し、英語で積極的にディスカッションできる。

事前学習

・自国についてよく理解し、また、日本と台湾の違いを知るために、以下のことを調べ情報収集した。
　→日本の概要
　　文化／歴史
　　保健医療制度／看護教育制度
　　災害への取り組み

・推薦図書や講義資料を活用したり、外務省・厚生労働省・日本看護協会、WHO・UNICEF・WB、NHK、国土交通省などのウェブサイトを閲覧し、日本と台湾のことや2二国間関係について調べた。

・「人と未来防災センター」にて日本の防災・減災への取り組みや住民への啓もう活動の実際を学んだ。

・JICA関西にて、様々な国の文化や価値観、生活環境の相違点を知ると共に世界、および日本におけるSDGsの取り組みを学んだ。

以上の内容を伝えるため、英語での発表資料を作成した。

期中活動

・「日本の概要・文化、保健医療制度・看護教育制度」についてプレゼンテーションを行い、英語での自己紹介を行った。

・最先端のAI技術を駆使した英語による看護技術演習を受講し、日本の看護技術教育との違いを学んだ。

・「台湾の伝統医療と看護」の講義を受講し、その実際を体験して、日本にはない異文化の医療を学んだ。

・「台湾における長期療養ケア」を受講したうえで、長期療養者施設を訪問し、高齢化社会における介護問題について日本との共通点や相違点を学んだ。

・「九二一地震教育園区」を訪問し、台湾での地域住民に対する啓蒙活動の実際を学び、日本の防災・減災への取り組みと比較した。

・亜洲大學附属病院を見学し、日本にはない診療科や伝統医療について説明を受けた。

「期中活動の学びについて」英語で報告会を開催し発表した。











1) 日本の文化、保健医療制度、看護教育制度を自主的に調べ、英語でプレゼンテーションを行った。
→国際機関等の資料や様々な公的データ（WHO,UNICEF,WB,日本看護協会、厚生労働省、外務省）を活用して調べた。

“私たち”を紹介するにあたり、まず“自身のことについて”理解しておく必要がある。そこで上記のサイトなどを調べることで、”世界の中における日本”を認識したり、日本の医療・看護制度を正しく説明できるようになった。

それにより、様々な国の情報および保健医療に関するデータにアクセスするスキルを身につけ、ひいては世界全体の保健医療の状況や問題を考えられるようになった。

2) 日本の看護の理念を英語でプレゼンテーションした。

→日本看護協会による「看護職の倫理綱領（以下、倫理綱領）」を確認し、日本の看護の理念を再認識したうえで、それらを説明すべく英語で準備をした。

国際看護師協会による「倫理綱領」は国際的に共通理解されている。しかし、日本の「倫理綱領」では内容に違いが認められる。改めて”日本の看護“を認識したり、国によって看護の考え方や理念が異なることを知った。”日本の看護“を他国の看護職に伝えたり、”他国の看護“を知ることは、看護の国際交流や異文化看護の実践に必要なことであると考えるようになった。

3) 台湾の保健医療制度、看護教育制度を理解するとともに、台湾における看護の実践例を学び、日本との共通点/相違点を見出した。

【台湾の保健医療制度】
→台湾の伝統医療や保健医療制度について受講し、日本との共通点や相違点を見出すことができた。
・伝統医療: 鍼・灸・刮痧・氣・健康茶・漢方
伝統医療の治療を受けると、保険適用となる。
・保健医療制度: 全民保険制度で被保険者を職業によって6種類に分けられ、保険料や自己負担額・医療費免除などが決定される。
介護保険はない。

【台湾の看護教育】
→最先端のAI技術が導入されており、それらを駆使した授業が行われていた。
・Google機能を活用し、少人数参加の複数の部屋に分かれながら同時に映像を用いた授業がなされていた。また、VRを活用した演習もあり、限りなく実体験に近い体験が得られる効果があった。


看護技術演習

【台湾の高齢者看護】
→「台湾における長期療養ケア」を受講し、高齢者向け長期療養者施設を訪問して、台湾の高齢化社会についての現状を学んだ。
・台湾の高齢化率は、17.5%（2022）と、日本の方が15年早く、超高齢化社会に進行している。
・台湾には介護保険がないため、日本のようなケアマネージャーが介することがなく、要介護度/要支援度といった分別がない。しかし、施設におけるケアは認知症のある高齢者に対し、一人一人の特徴に合わせた安全が配慮され、また機能低下を予防するケアが行われていた点は日本と同様であった。


長期療養者施設


「台湾の伝統医療と看護」受講

5) 英語力を向上させ、英語による講義を理解し、英語で積極的にディスカッションを行った。。

→英語表記の国際機関のHPやデータを読み取ることを日常的に行った。
・正しい文法や用語を確認しあいながら、効果的なプレゼンテーションについても学び、わかりやすい表現を心がけて資料を作成し、英語による日本の保健医療制度の紹介に繋げた。
→日常的に学生間、教員と英語での会話を意識して行った。
・イントネーションや発音、わかりやすい表現方法に気を付けて練習を行った結果、英語でのコミュニケーションに自信を持てるようになり、人前でも英語で発言出来るようになった。
→日常生活の場面で積極的に英語を使ってコミュニケーションを行った。
・駅や店舗においても自主的に英語で会話し、他国での生活に馴染みやすくなった。
・センタープログラムデア開講されている「医療英語や渡航英語」を自主的に望んで参加した。また、文法や発音を再学習する機会にもなった。



アジア大学の学生との交流

考察
台湾においては、独自の文化があり伝統医療が実践されており、独自の保健制度がある。またAIを導入するなど最先端の看護技術教育もなされている。
台湾も日本と同様に高齢化社会が進行している。日本では、国民全員が平等に医療サービスを受けることが出来るが、台湾では、保険料が収入などの経済状況によって大きく影響を受ける。だが、台湾には、介護保険制度がないが上に、すべての高齢者が同じ水準の医療や介護を受けることが出来ない。そこで、すべての高齢者が同じ水準の医療や介護を受けることができるよう、介護保険制度を導入することが必要であると考えた。介護保険制度には、すべての高齢者が同じ水準の医療や介護を受けることが出来る。日本では、介護保険制度があることによって、介護度に応じて様々なサービスを受けることができ、経済状況に関わらず、すべての高齢者が平等にサービスを受けられている。
そのため、台湾でもこの制度を導入することで、すべての高齢者が平等に医療を受けることが出来るのではないかと考えられる。このことは全世界が取り組んでいるUHC（Universal Healt Coverage）につながることである。
台湾独自の伝統医療については保険制度が活用でき、病院においても伝統医療の診療科が設けられている。東洋医学で受療できることは、患者にとって文化的な側面において安心・安寧という効果をもたらすのではないか。“文化看護（Cultural Nursing）”に通ずる。
AIやVRを看護技術演習に取り入れることで、より臨床に近い実体験ができ、緊張感をもって受講することになる。日本にも導入していけるとよい。

台湾でのグローバルスタディにより、異文化看護の実際を体験することができ、語学力の発達にもなった。
その国の文化や保健医療・看護を理解して実践することの必要性を学んだことは、今後、海外での国際看護活動に携わるときに大いに役立つ。
また、日本国内においては、在留外国人の患者に対し、その人が自国にてどのような医療や看護を受けているのかその背景をアセスメントする視点を持てるようになった。
看護職は、あらゆる場所のあらゆる人を対象とする。彼らをひとりの人間として捉え、国籍や文化、宗教、信仰が異なることに捉われず、考え方や価値観は様々であることを前提として関わるということを本グローバルスタディで時間することができた。
それぞれの国の看護の在り方を尊重しあい、互いに交流していくことで世界全体の看護の質の向上にもなる。そのことがSDGsにおける「すべての人に健康を」の達成に貢献するものと考える。

ブータンから学ぶ幸せに生きるためのヒント

6201048 清水陽斗、6201065 寺西海人、6201106 宮崎梨織奈、6201111 森岩皇雅、6211026 亀村涼乃

1. プログラムのねらい

ブータン人との交流やインタビューなどの調査を通して、人にとっての幸せとは何かを追究し、現在の日本において幸せに生きるためのヒントを得ること。

2. 学習目標

①ブータンにおける幸福感をもとに、日本人にとっての幸福について、自分の考えを表現できる。
②心理的研究手法を学び、研究報告書を作成することができる。

3. 事前学習での取り組み

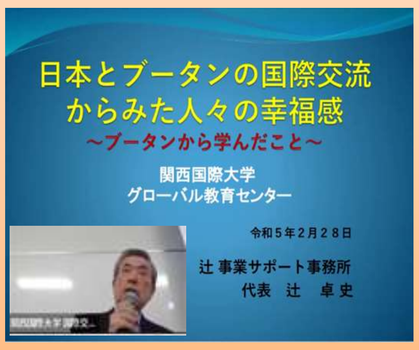
①ブータンに関する調べ学習、発表
②映画「ブータン 山の学校」視聴
③有識者による講演会
④ブータン人留学生へ神戸案内

→ 歴史や文化、宗教、自然環境、幸福、社会問題について理解を深めた。

⑤幸福感に関する先行研究の概観
⑥臨床心理学的研究手法の学習

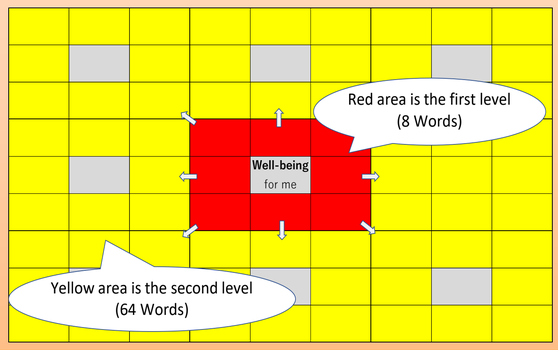
→
- 主観的幸福感尺度（伊藤，2003）を活用した質問紙調査：
- マンダラチャートによる幸福イメージの抽出（下図参照）
- （ブータン人高校生に対するインタビュー調査の準備











4. オンライン交流会

日　時：2023年3月18日（土）13：00-16：00（現地時間10：00-13：00）
形　式：ZOOMによるオンライン交流
参加者：日本人大学生7名（教員2名），ブータン人高校生8名（教員1名）
（ブータン人留学生4名，ブータン有識者3名）

内容：・異文化交流（自己紹介、相互プレゼン）
・調査報告およびディスカッション
（1）主観的幸福感に関する質問紙調査の結果レポート
（2）「Well-being」テーマとしたマンダラチャートの結果レポート
（3）インタビュー調査（日本人大学生、ブータン人高校生に質問した）





調査（1）質問紙調査

【対象】日本人大学生80名（男性62名，女生18名，平均20.3歳（*SD*=1.3）
ブータン人高校生101名（男性35名，女生66名，平均20.0歳（*SD*=5.4）
【時期】2023年3月
【手続き】質問紙調査(Google formを使用)
【内容】人々の暮らしと幸福感に関する意識調査
主観的幸福感尺度（伊藤，2003）15項目に対して5件法で回答
【分析】各15項目ごとに、日本人とブータン人で*t*検定を行い、比較した

Figure1.Result of questions about your life and happiness

ITEMS	Japanese Mean	Japanese SD	Bhutaness Mean	Bhutaness SD	t test tscore	(significant)
1. Do you feel your life is interesting ?	2.9	0.7	3.0	0.7	-0.51	n.s.
2. Compared with the past, do you feel your present life is:	3.1	0.6	3.4	0.9	-2.99	***
3. On the whole, how happy are you with the things you have been doing in recent years ?	3.1	0.5	3.4	0.9	-2.4	***
4. Do you feel you can manage situations even when they do not turn out as expected ?	3.2	0.5	2.6	0.9	4.91	***
5. Do you feel confident that in the case of a crisis (anything which substantially upsets your life situation) you will be able to cope with it /face it boldly ?	2.7	0.7	3.0	0.6	-2.17	***
6. The way things are going now do you feel confident in coping with the future ?	2.8	0.7	3.0	0.7	-1.81	*
7. Do you think you have achieved the standard of living and the social status that you had expected ?	2.7	0.7	2.7	0.6	0.05	n.s.
8. How do you fell about the extent to which you have achieved success and are getting ahead ?	2.4	0.6	3.4	0.8	-8.55	**
9. Do you normally accomplish what you want to ?	3.1	0.6	2.5	0.8	4.48	***
10. Do you feel your life is boring/ uninteresting ? (R)	2.1	0.7	2.2	0.8	-1.05	*
11. Do you worry about your future ? (R)	3.0	0.8	3.6	0.6	-4.88	**
12. Do you feel your life is useless ? (R)	1.9	0.8	1.9	0.9	0.42	n.s.
13. Do you sometimes feel that you and the things around you belong very much together and are integral parts of a common force ?	2.5	0.7	2.7	0.6	-2.42	*
14. Do you sometimes experience moments intense happiness almost like a kind of ecstasy or bliss ?	3.1	0.6	3.1	0.5	0.64	n.s.
15. Do you sometimes experience a joyful feeling of being part of mankind as of one large family ?	2.4	1.0	3.1	0.6	-5.64	***

注）　***p<.001　**p<.01　*p<.05　（R）　reversal item

【ブータン人】
主観的幸福感が比較的高く、特に現状への「満足感」や「至福感」が高かった。一方、将来に対する不安も高かった。
⇒社会という集団の中で幸福を感じている
【日本人】
予期せぬことに対処する「自信」や成し遂げる「達成感」の得点が高かった。
⇒個人での成功に幸福を感じている

調査（2）マンダラチャート

【対象】日本人大学生8人（男性3名，女生5名，平均20.3歳（*SD*=1.3）
ブータン人高校生8人（男性4名，女生4名，平均20.0歳（*SD*=5.4））
【時期】2023年1月
【手続き及び内容】マンダラチャートに「私にとっての幸せ」から思い浮かぶ8ワードを記入（第1水準）。さらに、そのワードから思い浮かぶものを、それぞれ8ワード記入（第2水準）。

mandala chart for Japanese①

雑貨 (general merchandise)	アクセサリー (accessories)	靴 (shoes)	枕 (pillow)	ベッド (bed)	昼寝 (nap)	貯金 (saving)	ゲーム (games)	散財 (splurge)
友達 (friends)	買い物 (shopping)	服 (clothes)	リラックス (relax)	寝る (sleep)	暖かい (warm)	買い物 (shopping)	お金 (money)	外食 (eating out)
日用品 (Daily necessities)	化粧品 (cosmetic)	鞄 (bag)	寝転ぶ (lie in)	疲労回復 (Fatigue recovery)	夢 (dreams)	投資 (investment)	旅行 (travels)	課金 (Billing)
買い物 (sopping)	映画 (movies)	カラオケ (karaoke)	買い物 (shopping)	寝る (sleep)	お金 (money)	脱毛 (hair loss)	ネイル (nail)	エステ (Esthetic)
居酒屋 (Izakaya)	友達 (friends)	旅行 (trip)	友達 (friends)	私にとっての幸せ	美容 (beauty)	まつ毛 (eyelashes)	美容 (beauty)	美容院 (beauty salon)
楽しい (fun)	テーマパーク (Theme park)	しゃべる (Chatter)	遊ぶ (play)	家族 (family)	食べる (eat)	まつエク (eyelash extension)	メイク (make)	ダイエット (diet)
旅行 (trip)	映画 (movies)	地元 (local)	楽しい (fun)	安心 (feel safe)	信頼 (trust)	焼肉 (yakiniku)	寿司 (sushi)	ラーメン (ramen)
カラオケ (Karaoke)	遊ぶ (play)	ドライブ (drive)	仲良し (chum)	家族 (family)	お母さん (mother)	アイス (ice cream)	食べる (eat)	鍋 (nabe)
買い物 (shopping)	友達 (friends)	テーマパーク (Theme park)	兄弟 (brothers)	姉妹 (sisters)	お父さん (father)	ジュース (juice)	ステーキ (steak)	フルーツ (fruits)

mandala chart for Bhutanese①

Balanced diet	Exercise	Check-up	Imagination	Passion	Purpose	Video games	Painting	Dancing
Mediate	Heath	Worry	Priority	Dreams	Creativity	Basket ball	Satisfaction	Singing
Sleep	Habits	Hygiene	Work	Ambition	Study	Browsing	Television	Adventure
Self-Aware	Stress	Empathy	Health	Dreams	Satisfaction	Opinions	Ideas	Understand
Focus	Mindfulness	Acceptance	Mindfulness	Well-being for me	Communicati	Feelings	Communicatio	Confidence
Open mind	peace	Patience	Family	Adaptation	Responsibility	conversation	Information	Open up
Love	Care	Guidance	Willingness	Flexibility	Interaction	Actions	Ourself	Work
Resolve	Family	Support	Acceptance	Adaptation	Adjustment	Emotions	Responsibility	Law
Encouragemer	Role modal	Time	Values	Resilience	Civilized	Listen	Youth	Duty

Table1 日本人の第一水準頻出語

ワード	回数	割合
寝る/睡眠	8	12.9%
食べる/ご飯	8	12.9%
買い物	6	9.7%
お金	6	9.7%
遊び	5	8.1%
友達	4	6.5%
呑む/飲む	4	6.5%
バイト/働く	3	4.8%
美容	3	4.8%
犬/猫	3	4.8%
お風呂	2	3.2%
家族	2	3.2%
旅行	2	3.2%
ゲーム	2	3.2%
その他	4	6.5%
	62	100%

Table2 ブータン人の第一水準頻出語

Word	Time	Raito
health	5	7.8%
satisfaction/contentment	5	7.8%
love	4	6.3%
happiness	4	6.3%
communication/ interaction/connection	4	6.3%
environment	2	3.1%
hope	2	3.1%
peace	2	3.1%
family	2	3.1%
mind fullness	2	3.1%
interest	2	3.1%
strength	2	3.1%
education/learning	2	3.1%
その他	26	40.6%
	64	100%

【ブータン人】
・「健康」、「満足」、「愛」、「環境」、「平和」など。
⇒「そのような状態であること」や「自身を取り巻く環境が充実していること」に幸せを感じる傾向。
・共通した回答が少ない　⇒多様な幸せの感じ方

【日本人】
・「食べる」、「寝る」、「買い物」、「遊ぶ」など。
⇒具体的な行動として自分の望むことができた時に幸せを感じる傾向。
・共通した回答が多い　⇒幸せの感じ方が画一的。

調査（3）インタビュー調査

【対象】ブータン人高校生8人（調査2と同様）
【時期】2023年3月18日（土）オンライン交流会内
【手続き及び内容】zoom（ブレイクアウトルーム）にて、
日本人大学生1名とブータン人高校生が1名ずつ入室し、
それぞれのルームで半構造化インタビューを実施。

質問	回答
休日の過ごし方	ゲーム/アニメ/TikTok/運動・スポーツ/寝る/勉強/家族と過ごす/家の手伝い/友達と遊ぶ/ドライブ
ブータンのお勧めの場所	ティンプーの町並みや山の上から見る景色はとてもきれい/タクツァン（お寺みたいなところ）
日本のイメージ	漫画/日本人は優しい。敬語を使っている。ブータン人と似ている/健康なイメージ。校則も緩そう/良い国
行ってみたい国 暮らしてみたい国	他の国にずっと住むことは大変そうだからあまり考えたことはないが、行くとしたら、日本か韓国。
将来の夢	軍隊/医師/自立のため大学進学（オーストラリア）/様々なビジネスをしてお金をいっぱい稼ぐこと/サッカー選手

・ブータンの人はフレンドリーに話せる人が多かった。
・ブータンと日本の若者の休日の過ごし方は似ていて親近感が湧いた。また、日本のアニメは人気。
・将来は「軍隊に入りたい」と自国愛をもっていた。
・高校生とは思えないぐらいしっかりと将来について考えていて、それに向かって努力していた。
・日々の生活を大切に過ごしていると感じた。

5. 総合考察

日本人は、幸せを個人的に捉え、何かを所有した時や何かができた時に幸福を感じやすい。ブータン人は、幸せを社会や集団の視点で捉え、自身を取り巻く環境が健全である時に幸福を感じる。ブータンの国の制度が手厚いことが、幸福感の上昇につながっている。**環境や社会の安全性が幸福とつながってくるし、私達も、社会の一員である認識をもち、具体的な行為だけでなく、どのような状態になると幸せなのかと考えていくことが、我々日本人にとっての幸福につながると感じた。**

6. プログラムを通して学んだこと、今後への活かし方

・普段日本で生活していると、これほど海外の人と会話する機会がなかったが、この経験を活かし、世界にもっと関心を広げていくきっかけとなった。
・交流では、自分から積極的に会話を始めることが重要であり、英語が話せなくても、ゆっくり話したりジェスチャーを用いて、とにかく話すことの大切さを学んだ。今後、社会人となり、職場でのコミュニケーションに役立てたい。
・人の幸せについて多角的に考えることができ、今後の良いよい生活に生かしていきたい。
・先行研究を調べ、調査、分析してまとめるというプロセスを学べたので、卒論に生かしたい。

2022冬 グローバルスタディⅠ　中国青島

グループ１
寺地　悠起、星山　千智
グェン　チャン　ビック　ゴック
グエン　ティ　フォン　アン

自動運転の未来

研究背景

- 自動運転レベル＝車両が完全に人間のコントロール下に置かれて走行する「レベル0」を最下位とし、一切のコントロールを人間が行わない「レベル５」までの6段階に区分したもの。

目的

- 世界で自動運転はどれぐらい進んでいるのかを調べる
- 完全自動運転まで進んだ時には、普通自動車の免許の取得はいるのかについて考察する



メリット
- 人が運転しなくても車を走らせることができる
- 高齢者も車に乗って走行させることができる
- 事故率の減少

デメリット
- 運転手の技術不足
- 失業者の率が高くなる
- 緊急時の対応が問題になる

考察
- 日本も世界の中で自動運転のレベルは高い
- 完全自動運転になるにはまだまだ時間がかかる
- 完全自動運転でも免許取得は必要なのか

実験結果

・日本より海外の方が自動運転が進んでいる。日本の自動運転レベル３。世界では自動運転レベル４もあり

・「運転免許が必要」「運転免許の不必要」という２つの意見で議論されている

結論：

- 人間の能力や技術で将来的に完全自動運転の車が街中を走ることは可能かもしれない
- 完全自動運転になれば、標識もなくコンピューターが認識し走行することになる
- センサーが反応して走行することで事故率の減少につながる
- ドローンの発達から空中での自動運転も可能になるかもしれない

↓

免許の取得はなくても完全自動運転自動車に乗ることが可能に

中国の民族衣装と着物の違いについて
グローバルスタディⅠ（西安/2022冬）

5201064　阪井　百華
5201097　坪田　舞夏
5201107　野尻　胡桃

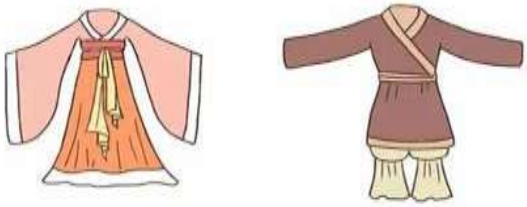


はじめに

日本の着物の種類や歴史などについて調べた。着物は日本の文化であると思っていたが、3世紀ごろに中国から伝わったものであると言うことが分かった。着物に似合う観光地、着物の歴史や種類について調べていて、新しい発見も沢山あった。このことから奈良時代から平安時代にかけての着物が中国と似ており、日本と中国は昔から密接な関係ったということが分かった。
中国では伝統服を着て観光地を回る文化がないため、中国の民族衣装について調べてみたいと思った。

中国の民族衣装について

中国の民族衣装の系統は、大きく「漢服」と「胡服」の2つに分かれます。漢服は現在も中国の人口の9割を占める漢民族の伝統的な衣装である。
清の時代に満州族の服装や髪型が強制されたことをきっかけに、漢服の文化は衰退した。日本では成人式などのイベントで着物を着ますが、中国では特別な機会でも漢服を着用するのは一般的ではない。



汉服　　胡服

漢服と着物の違い

着物
きっちりとした隙のない着方が主流である。直線的でシンプルな形である。

漢服
漢服は全体的にゆったりとしたつくりで、優雅さを持つ。襟があり、ワンピースのように上下がつながった前開きの衣に帯を締めたスタイルが特徴で袖は太く、裾は地面につくほど長く、下には裙子（スカート）や袴（ズボン）を履き足を隠しすことができる。

**中国の学生さんが紹介してくれた
おすすめの観光地！**

①



②



③



①ハルビン：氷雪祭

②大連：星海広場

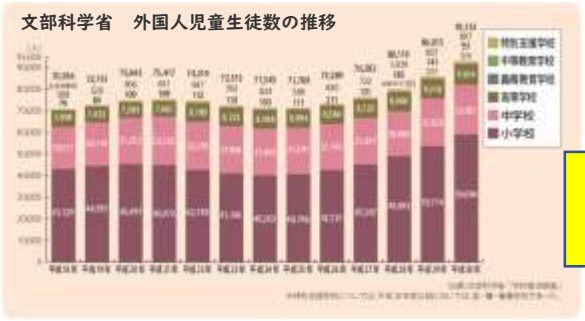
③大連：聖亜海洋世界

★まとめ★

今回、漢服について調べてみて、ワンピースのような作りになってるため女性らしさを感じ、着物よりも着やすく動きやすい伝統衣装であること分かった。漢服を着て中国の観光地を回るツアーやレンタルショップを沢山設置することで中国の魅力ある文化がより広まるのではないかと感じた。最近漢服を着ることがSNSで話題にもなっているため、日本でも漢服を着ておすすめの観光地を回ってもらいたいと感じた。

「小学校での外国にルーツがある児童へ教育の現状と課題」

グローバルスタディⅠ台湾/２０２２冬台中
上坂優亜　北井洸太　山西希実　山本若奈



近年外国人児童数が増加してきている
➡外国にルーツがある児童への教育現状と課題は？

リサーチクエスチョン

- 外国にルーツがある子どもが授業中どのようなことでつまずいているか
- 外国にルーツがある子どもが使ってる教材はどうなっているのか
- 日本国籍の子どもと外国にルーツがある子どもとの日常的な関わり方はどのような状況なのか
- 教師が外国にルーツがある子どもとどのように関わっているのか

フィールドワーク

場所　兵庫県内公立A,B,C,D小学校
特徴　外国にルーツのある児童を受け入れている

日本語指導教室(国際)教室の活動
１，一人一台のポケトークを所持
２，ブロックかるた、すごろくを用いて日本語指導
３，Zoomを用いて他学校の児童と交流



１、サバイバル日本語が習得できているか

日本の学校生活や社会生活の中で健康、安全、関係作りなど日常的に使う言葉
→日本語指導（国際教室）などで主に指導

２，教科書、黒板で書かれていることが分かるほどの日本語が習得できているか

→幼少期から日本にいる児童は習得できていることがある
※児童を取り巻く環境（経済、家庭での言語、宗教）などにより個人差がある

交流会

場所　関西国際大学
　　台中教育大学
交流方法　Google Meet
日時　3月7日



内容
3つの議題についてお互い発表
１，学校のカリキュラムについて
２，コロナ渦の変化について
３，留学生の体験談
日本と台湾の学生によるゲーム

・積極的に話しかけてくれた
・台湾の人たちと一つの物を作れた
・文化の違いに気づけた

日本人のほうが消極的だったかも

議題の中から…

留学生からの体験談の違い！！
＜日本の留学生の体験談＞
マイナスのイメージが多く不安だったが実際に会ってみると
「話してみると優しい人が多い」
「聞くと丁寧に教えてくれる」
＜台湾の留学生の体験談＞
けがをしたまま、歩いていると顔も知らないのに女の子が上着で傷口を塞いでくれた。その後コンビニに行きティッシュを買ってくれた。

台湾と日本のイメージの違いが生じる！！

まとめ

外国籍の日本語習得状況の実態
授業についていけない児童もいる
＜原因＞
・教科書の字を読むことが困難
・教員のサポートをする時間が中々とることができない
・日本語教室の授業頻度が少ない
→学校で最低限生活できる日本語のみ
・外国にルーツがある子どもたちが積極的に日本の子どもたちとコミュニケーションをとることに壁を感じる状況
→日本人のイメージに関係がある

将来どのような境遇に合う可能性があるか

先行研究から…
外国にルーツがある児童の日本語能力の低さや学校文化への不適応により進学率は低く、就職率も低い

グローバルスタディから…
児童を取り巻く環境（親の家庭内での言語、習い事、家庭の経済）により日本語の習得が可能であり日本社会にうまく入り込むことができる可能性がある。

グローバルスタディ台湾高雄教育旅行

1班　赤瀬媛香　王吉宇　志賀百華　大和未悠

プログラム内容

「平和と自然をテーマにした海外教育旅行プラン」の作成を目的とし、プログラムを通して教育旅行の作成方法や、台湾の文化や自然、日本との関係について学習活動を行った。

台湾高雄市は台湾第三の都市であり、周囲の地理環境などから年中日が差している。今回のプログラムでは、高雄市の中でも「客家」という中華系の民族の村である美濃区についての学習を行った。



台湾と日本の歴史について

日本統治化の台湾では、住民間で人種差別があり、貧富の差や民族間の格差が問題となっていたということが分かった。

一方で日本統治化に台湾に伝わった文化として、漢字や日本語が挙げられ、その一部が今も台湾の文化に残っていることも分かった。

上記をふまえ、教育旅行プランの作成時に、日本統治化の台湾が舞台である映画の鑑賞を行うなど、事前学習として取り入れることが出来ると考える。また、台湾の文化を学ぶために美濃客家文物館などへの体験学習で生徒たちの学習に良い影響を与えると考えた。

グリーンツーリズムについて

事前学習と本学習時にグリーンツーリズムについての講義を受講し、学習を行った。グリーンツーリズムの定義や、イギリスでは【自然保護】、フランスでは【バカンス】など国によってグリーンツーリズムに対する価値が異なることが分かった。

日本の地方の村で行われている民泊プログラムもグリーンツーリズムの一つである。また、日本と同様に台湾高雄市美濃区でも民泊を行うことが出来るのではないかと考えた。美濃区の自然豊かな地域を民泊として利用することで地方へのインバウンド数向上につながると考えた。

教育旅行について

JTB神戸支店の社員さんやツーリストエキスパーツ西日本添乗業務センターの添乗員の方に講義を行っていただいた。その際に得た学びとして、学生にあった旅行プランを考えるために近年はSDGSの項目を学習内容に取り入れることが推奨されていることが挙げられる。これからの教育旅行では体験学習や探求型のプログラムが多く、企業との連携も行われていることが分かった。

また、より良い教育旅行プラン作成を行うためには社員だけでなく、生徒たちの保護者や教員の人々など、人とのつながりも重要であるということに気付いた。

高雄師範大学との交流について

高雄師範大学の大学院生、教授とオンラインでの交流を行った。その際に、客家語の勉強や客家文化についての学びを深めることが出来た。

現地学生との交流では、言語の難しさを痛感し戸惑うこともあったが、コミュニケーションを通して自分の世界が広がるのを感じた。また、交流の中で互いの国に対するイメージの共有を行い、互いを尊重しながら意見交換をすることが出来た。

教育旅行プランの作成では、日本では体験できない現地の学生や地域の人々と交流する機会を設けたいと考えた。

台湾高雄教育旅行プラン1班

活動を通しての気づき

本プログラムの活動を通して、国や民族などの境界を越えて互いを尊重して関係を築くことや、人と人のつながりはとても貴重であり、人生においていい影響を与えるものであるということ、一つの物事、ものづくりは一人の力だけでなく、大勢の人々と歴史、知識により作り上げられているものであるということを改めて学ぶことが出来た。

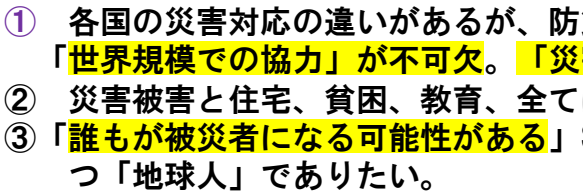
グローバルスタディⅠ（国内2022ACP・多国籍プログラム）　観光学科　横山雅子　心理学科　堂下優斗

1　プログラムの概要　The Japanese Safety Management and Japanese Culture

主として「災害復興」の視点に基づく「自然災害と安全・安心」に関する国内外の取り組みを学ぶ。さらに、参加学生の出身国や地域社会の問題に引き付けて「自然災害と安全・安心」に関する課題について考察し、今後の取り組みを考える。併せて、学習の過程を通し日本人学生と留学生とが相互の文化・価値観の相違を理解し、コミュニケーションを通じての汎用的能力育成や相互理解を図る。（シラバス引用）　マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナムの19名の学生、本学の学生2名と共に受講した。

2．事前学習（第１回～第３回：講義形式による基本知識についての学び）

第1回　阪神淡路大震災とコミュニティ復興
- 阪神淡路大震災の概要理解
- 復興政策と地域レベルの再建
- 巨大災害後の危機管理サイクル



第2回　震災による被害と生活再建
- 誰が震災で犠牲となったのか
- 国は個人の生活再建を支援できたのか
- 復興基金という工夫

・阪神・淡路大震災による死者の特徴
・国連開発計画(UNDP)による災害被害の考え方
(Risk) = (Hazard) × (Vulnerability)
Risk: 災害による被害　Hazard: 災害の規模や頻度　Vulnerability: 社会的脆弱性

第3回　阪神淡路大震災と長期的な観点から見る経済的復興
- 長期的に見て、阪神淡路大震災からの経済的復興は成ったのか

・経済的復興に求められていたもの
・復興計画に基づく都市の「復旧」は、新産業の創造、新しい都市圏の形成、人口の増加につながらなかった。
・「復興に向けた経済発展を」というテーマについて、地方と国では大きな温度差があった。

事前学習における学びのまとめ
- 巨大災害後の危機管理サイクルにおける復旧と復興の違い⇒市民目線の復興、経済発展を通じた災害復興の希求が必要

横山 … 真の復興とは、経済発展を通じて地域社会の脆弱性を克服する過程である
堂下 … 復旧と復興、防災と減災の違いを知るとともに、その方針と考え方を学んだ

3．期中活動（2-Feb～13-Feb：参加学生との学習と交流）

2/2 留学生19名Check in
受付・書類記入他手続き補助

2/3 オリエンテーション
Field Research１　三宮・元町エリア

2/4 Lecture
①国際的な防災政策の潮流と阪神淡路大震災
②阪神淡路大震災からの復興：日本の災害法の課題と阪神淡路震災復興計画

2/5 日本文化体験
京都観光

2/6 Lecture
③市民目線で見る阪神淡路大震災：災害被害の経済・社会的側面とコミュニティの再生に向けた課題
Field Research２　新長田駅周辺

2/7 Lecture
④CODE代表吉椿正道氏による講義
Field Research３　阪急岡本駅周辺

2/8 Lecture
⑤神戸は復興したのか：長期的な観点から見る被災地の経済的復興過程
Field Research４　神戸市危機管理室防災展示室見学及び講義

2/9 Group Work
Field Research５　人と防災未来センター＆ひょうご震災記念21世紀研究機構訪問及び講義

2/10 Final presentation
修了証書授与式・送別会

4．まとめ　：　自身の気づき　今後に向けて

Ⅰ「公務員時代とは異なる視野。新たな気づき」
① 災害対策基本法と個人の財産への補償のジレンマ。主役は「地域住民」。地域の「歴史」「個性」の尊重が不可欠。画一的な復興は未来に繋がるのか。
② 町づくりには「命」「生活」「町」を守る「経営観念」が必要。
③「復興」は「未来を創造」すること。「永遠」である。
④ 防災は日常生活の中、延長線上に位置づける。

Ⅱ「災害に『国境』はない」「世界は繋がっている」「災害対策は『地球規模』の世界共通課題」
① 各国の災害対応の違いがあるが、防災や復旧・復興は「世界規模での協力」が不可欠。「災害に国境はない。」
② 災害被害と住宅、貧困、教育、全ては繋がっている。
③「誰もが被災者になる可能性がある」SDGsと利他の心を持つ「地球人」でありたい。

Ⅲ　今後も可能な限り「常に学び、考え、行動する」
① 国籍・世代を超えて英語で意見交換や交流を行えたことは貴重な経験となった。AIだけでなく「人との交流」がインクルーシブ社会に繋がると感じた。
② ４ヵ国の学生との英語によるコミュニケーションで、英語学習に対するモチベーションが高まった。
③ 留学生のダンスのようなプレゼンや、1枚の写真から盛り上がる講義中の活発な発言などに刺激を受けた。
④「防災士」の資格取得やＮＰＯ活動に関心が高まった。
⑤「地域貢献」という在職時からの思いを、小さくても具体的な行動に絞っていきたいと感じた。

Ⅰ「全く新しい学びの連続」
① 私は臨床心理を専攻しているため、災害時に被災者の精神状態がどういったふうに変化する可能性があるかを学んだことはあったが、今回復興とはなにか、どういった方針のもとに行われるかなど全く別の視点から災害を学ぶことができた。
② このプログラムに参加するまでは、災害の映像や資料を見たことがあるだけで、「その町がその後どうなったのか」を学ぶ機会は全くと言って良いほどなかったが、今回国や地域での復興方針により街並みにどういった変化が出ているのかを実際に見て学ぶことができた。

Ⅱ「普段の生活や遊び、地域交流が災害対策になる」
① 事前学習で「みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）」に行く機会があったが、その公園のテーマとして「市民の活動の場としていく」「災害に備える場としていく（避難所として機能する）」とあり、普段は公園として遊ぶことができるのに加え、地域の人同士が公園で遊ぶ中で交流を深めることで、実際に災害が起きた際に協力し合うことができるのだと学ぶことができた

Ⅲ「伝えようとする努力の重要性」
① 私は臨床心理専攻で、英検も２級までしか持っておらず、自然な会話にはほど遠い状態であったが、何度も詰まりながら言いたいことを伝えようとすると真剣に聞いてもらえることがとても多く、「伝えようとする姿勢」を持つことがコミュニケーションにおいて重要なことだと改めて認識できた。

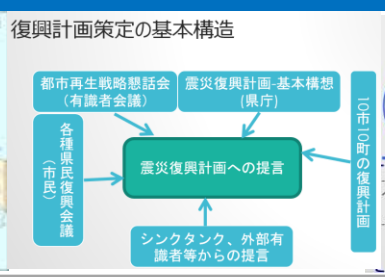




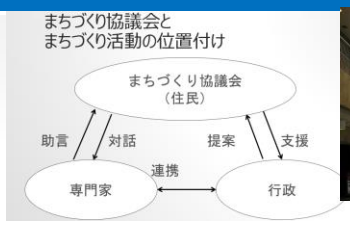
GSプログラムのスナップショット

1．事前学習













マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナムからの学生との学びに緊張と期待。現地の下見も含め、事前に日本における復旧・復興について学んだ。



[阪神淡路大震災](#)

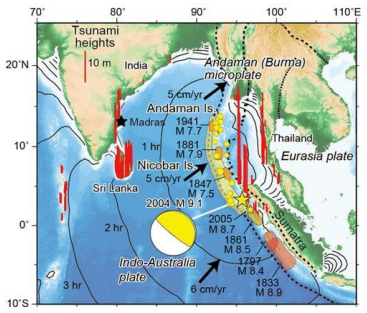
[発生](#)：1995年1月17日午前5時46分　[規模](#)：M7.3、　大震度７　[人的被害](#)：死者・行方不明者：6,437人　重傷者：10,683人、避難者数：316,678人（95年当時の神戸市の人口は約145万人）[住家被害](#)：全壊：104,906棟、半壊：144,274棟

2．期中活動





2/6,2/7
実際に復興したと言われる町を歩き、復興方法や現在の状況を学んだ



2004 Indian Ocean Earthquake

The 2004 Indian Ocean tsunami remains the deadliest tsunami in recorded history, which had a magnitude 9.3 and a rupture length of approximately 1200 km, triggered a tsunami that reached 30 m in height and caused at least 230,000 fatalities in 15 African and Asian countries, such as Indonesia, Sri Lanka, Thailand, and the Maldives.

Sources: STEIN, S., and E. A., OKAL, Ultra-long period seismic study of the December 2004 Indian Ocean earthquake and implications for regional tectonics and the subduction process (2007) Bull. Seismol. Soc. Amer., 97, S279–S295, 2007

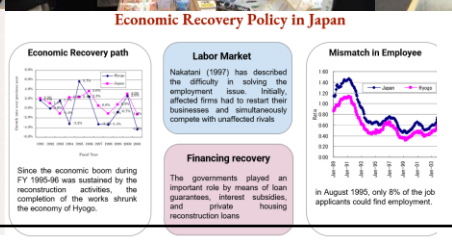
2/10
最終プレゼン各々グループに分かれ、それぞれが学んだことや感じたこと、今後の対策について発表した





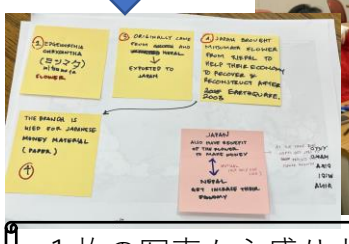










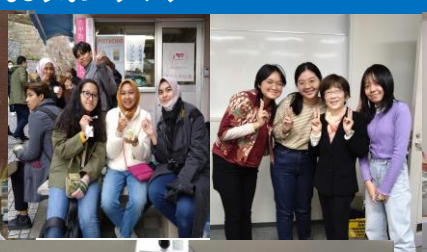




1枚の写真から盛り上がる。積極的で参加型の講義

3．伝えたい事・学んだ事・お気に入り















人と防災未来センター3階展示物

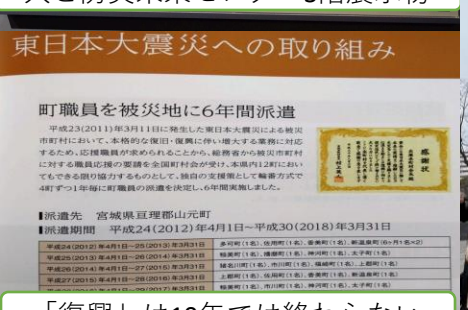












「復興」は10年では終わらない

こちらからポスターと拡大資料をご覧いただけます

拡大資料



人と防災未来センター　３階展示物

グローバルスタディⅠ（国内/2022冬神戸）

移民の子どもの人権・ダイバーシティを考える

明田理名/和泉有馬/岩崎怜/前川菜々香/三谷尚平/村上剛基/山本蓮/岡田卓真

指導担当：社会学部 山本 晃輔

本プログラムの目的

本プログラムの目的は「移民」の子どもの人権とダイバーシティを考えることである。そのために、神戸市長田区のNPO法人定住外国人支援センターにおける移民の子ども学習支援に携わった。

本プログラムの参与団体

NPO法人神戸定住外国人支援センター：1997年設立。「ともに生きる」ことができる社会に向けて活動する非営利法人。少数者を守るために、個を大切にして（違いを認めた平等）、偏見や差別を取り除き、豊かな社会が実現することを願い活動している。

スケジュール

① 事前学習（書籍『外国人の子ども白書』、論文「国際化と都市政策が生みだした神戸市長田区への外国人集積ー グローバリゼーションが引き起こすマイノリティの周辺化」の輪読）
② 現地FW
③ 学習支援への参加（期中7回）
④ 事後学習（体験を動画で語る）

毎回参加後に「日報」を執筆し、概ね二週間に一回、指導教員が動画でコメント。やりとりを重ねる。

事前学習・FW

① 学校の宿題の補助：長期休暇に学校から出された計算ドリルや漢字ドリル等でわからないことの援助
② KFCのワーク： 子ども達の学習レベルに合わせた日本教育（漢字の練習や計算問題）
③ ・言語学習（文字の読み書き、文章の音読）： 在日期間が短い子どもに対して日本語の基本的な学習

現場参与前に私たちが学んだこと

なんとなく移民が増えているという認識だったが・・・

母国を離れて日本に住む理由、日本での暮らしで生じる可能性のある問題：生活習慣の違い、差別、偏見、経済的問題、就労率等
↓
移民の児童・生徒は経済的、生活的、社会的に安定していない。

親のしんどさが、子どものしんどさになってしまう

親が経済的に厳しければ、子どもも厳しい暮らし向きになる。こうした問題は日本人の子どもと同じである。そしてそれが移民の子どもの場合、より大きな問題となる。移民の子どもが進んで学習できる環境、参加しやすい空気作りが重要である。

学校教育でなにができるのか。支援団体になにができるのか。

事前学習では、学校現場で苦しい状況にある移民の子どもの状況を知った。
↓
では学校教育になにが不足しているのだろうか。なにが課題なのだろうか？

学習支援をはじめる

子どもを勉強させたい

移民の子どもは放課後になるとKFCに勉強にくる。学習支援の現場には、多様なルーツをもった子どもがやってくる。私たちの役割は、子どもらの宿題をみること。
参与してみると、「とにかく勉強をさせたくなってしまう」

コミュニケーションがとれない！

移民の子どものなかには、日本語が十分勉強できていない場合もある。日本語がうまく伝わらない、といったケースもあった。
↓
文字通りあの手、この手のコミュニケーションが必要

子どもたちの何気ない「言葉」から考える

学習支援といっても「塾」のような雰囲気だけではない。子どもたちの言葉に「ドキッ」とする瞬間もあった。
「好きな食べ物の話をしているときに、子どもが『母国？』それとも『日本？』という返答があった」
「中国人のこと嫌い？」という発問にどのように応えるか。

学習支援から考える

学習面の課題

「、」「。」の違い。「は」と「が」の違いといった日本語の課題。
文章題が読めないだけで、式は作れる（日常言語/学習言語）。
それぞれの文化に固有のやり方と日本式のやりかたが混在する。
宿題が難しすぎて、おいてきぼりになっている。

「勉強させたい」への反省

移民の子どもたちは「放課後」も勉強しなければならない。その大変さを考えると、ただ勉強させようとするだけではない。子どもに寄り添うことの難しさを学んだ。
→ では自分が担任をもつクラスならできるだろうか？

子どもの語りから学ぶ

「中国人の子どもは漢字を教えてくれようとしていた。自分の国が嫌いにならないようにしなくてはならないと感じた」という感想にあるように、移民の子どもたちが日常的に感じている孤立感や不安を改めて認識した。支援団体は子どもたちの「居場所」だった。それとともに、「学校」でも居場所をつくる、クラスの雰囲気をつくることが必要だと考えた。

振り返り動画

子どもはプラスアルファの学習に取り組んでいる
子どもたちの不安
自分は何人なのかゆれる心
自分は学校現場に出たときにどうすることができるか
子どもたちの学習への関り
子どもたちは話してくれた。けれどその背景を私は考えられていたか
自分の固定概念の大きさを反省した
わからないことに取り組むことの難しさ

グローバルスタディⅠ（国内/2022冬　三田市）

三田市内の外国にゆかりのある子どもへの学習支援

教育学部　豊岡優作　米井伸太郎　渥美梨乃　稲木暖花　岡田琴音　岡田真紀
興津大翔　奥田真緒　久保陽香　野村未来　松下莉恵　丸山愛子

全体の流れ

●事前学習（12月～1月）
　事前調査
　三田市国際交流協会（寿賀さん）の講義
　　・兵庫県や三田市の外国人について
　　・子ども学習教室SKIPについて
　　・日本語教育について
　活動準備

●三田での活動（2月）
　SKIPでの活動
　防災訓練
　お楽しみ会

●事後学習（3月、4月、5月）
　振り返り
　パワーポイント・動画作成

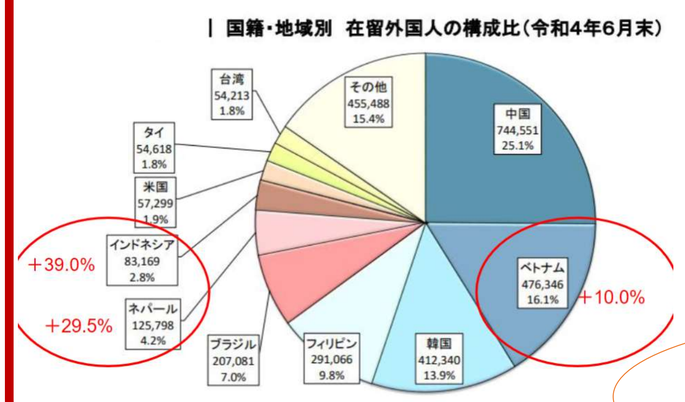




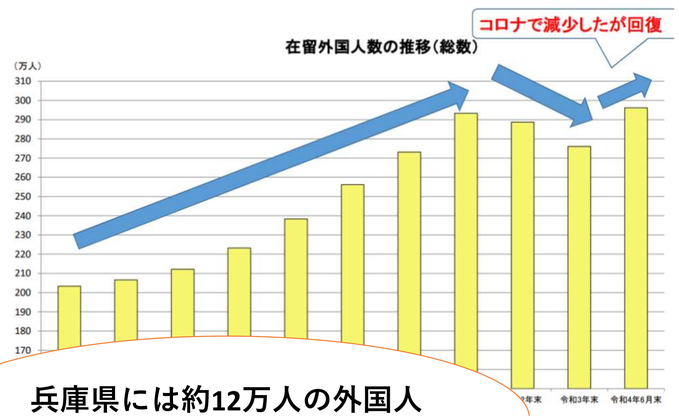



事前学習

1位：中国
2位：ベトナム
3位：韓国



特定技能が増加した



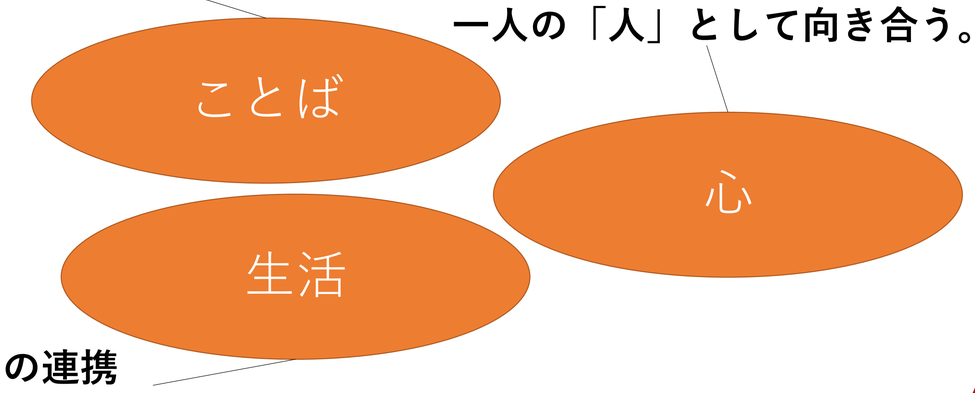
兵庫県には約12万人の外国人
（人口の2パーセント）

令和4年10月14日
出入国在留管理庁

3つの壁

「やさしい日本語」
通訳、日本語教室

「自分だったら…」と考える。
「外国人」ではなく、
一人の「人」として向き合う。



地域との連携
互いの文化を知る

SKIPでの活動

◎支援内容：宿題補助、学習支援（漢字の読み方）
◎「学びと課題」
①指導方法の違い
　未就学児から高校生まで幅広く利用しているため、年齢やそれぞれの子どもの個性やレベル、受験対策などに合わせて指導方法を変えなければならない。
→受験生は集中して受験勉強に取り組むため、小学生と別の部屋で学習していた。
②言葉やニュアンスの壁
　同じ言葉でも前につく言葉で読み方が変わったりするものは子どもも理解に時間を要していた。
→ホワイトボードやカードなど目で見て理解出来るような工夫

防災訓練

◎イベントの内容
　災害や救急、消防の基礎的な知識を翻訳を通して話を聞く。実際に火災や救護を想定して通報の仕方、電話での同時通訳の利用を体験する。実際に消防士の服や帽子を被って消防車に乗ったり、消化器で火を消す体験をする。
◎学びや課題
　地震や津波などの災害の時、焦っている中で的確に何が起こっているのかどうしたら良いのかを伝えることはよりも言葉の壁が大きいことが分かった。
　３つの壁を互いに乗り超えるためにも、海外の方が慣れない日本語を話すことの難しさ、対応の仕方をより多くの人に知ってもらうべきだと思った。

ICTを活用した文化紹介（ゆかりのある国・母国）

ICT（パワーポイント）を活用して自分の国について3人が発表した。パワーポイント作成時に、インターネットで一緒に調べたり、グーグルマップを用いて祖父の家の場所を探したりした。
　発表内容としては、それぞれの国（中国、ネパール、ベトナムなど）を写真やイラストを取り入れ、国の人口や文化、特徴、特産品などを伝えていた。
→言葉だけでなく写真を取り入れる工夫がされており、その国に行ってみたい意欲や興味を持つことができた。
**　他国の文化を知る機会と共に、自分の国に対する理解や自信に繋げられると活動だと感じた。**

SKIP動画の作成

　事後学習の一環として、SKIP の紹介動画を作成した。SKIPの活動をを広めることで、子どもたちには気軽に参加してほしい。
　SKIPは海外にゆかりのある人達が交流ができる場所であり、学習するだけではなく、楽しく遊んだり、農作業や防災訓練などのイベントがある。

まとめ

【振り返り】海外にゆかりのあるこどもとのコミュニケーションの取り方を学んだ。例えば言葉が通じなくても、身振り手振りやイラストなどで伝えることができる。また、年齢や見た目では日本語能力は判断できないこと、その子に合わせた支援が必要である。
【キャリア】**保育園や小学校において、外国にゆかりのある子どもたちが学びやすい環境の整備、居心地のいい雰囲気作りが大切である。**

外国人のための防災ワークショップ

1．本プログラムの学習目標

『三木市の実態・現状を把握し、三木市における在住外国人の防災対策支援に貢献できるようになる。』

2．良かった体験談

○日本語教室（子供向け）
・「避難」する時の良い例と悪い例の劇をして、どっちが正しいか子ども達に考えてもらうことで、してはいけないことが分かりやすかったこと。

○自由が丘連合自主防災訓練
・災害時に避難するときの工夫を確認できたこと。
・救護者への声のかけ方を知れたこと。

○防災バスツアー
・熱心に防災に向き合ってくれたこと。
・分からない単語を詳しく説明することができたこと。（震度とマグニチュード、震災と災害の違いなど）

3．失敗・残念だった体験談

○日本語教室（子供向け）
・地震や津波の動画を用意していたが、他の班に頼んでいたことや時間の関係で上手く活用出来なかったこと。

○自由が丘連合自主防災訓練
・三角巾を縛るお手本を見せるときに、上手く出来なかったこと。
・消防士の説明を「やさしい日本語」に変えられなかったこと。

○防災バスツアー
・ペアで行動だったので、他の子とコミュニケーションが取れなかったこと。
・防災センターの方が出してくれた質問の説明が上手く出来ず、内容が伝わりきらなかったこと。

4．学んだこと

○日本語教室（子供向け）
・スライド中心に教えるより、実演し子ども達に見てもらうことで、実際の場面の想像がつきやすく関心が高まるということ。

○自由が丘連合自主防災訓練
・今回のような防災訓練を通して、地域の人との交流を深めておくことで、一人暮らしの人でも災害時にお互いに声をかけあい助け合えるということ。

○防災バスツアー
・外国人の方の出身国は日本のように災害が多い地域ではない（津波や地震はおこりにくい）ため、災害についての知識が浅く危険性をあまり認識できていなかったが、実際に地震体験と火事の避難体験をしてもらい、災害の危険性を認識してもらえたこと。

5．活動後の気づき

○防災の方法を知る機会が少ない
・グローバルスタディを通して外国人の方と交流していく中で、外国人の方の防災意識が低いのではなく、どのように防災していけばよいのか分かっていない人が多い、防災について知る機会が少ないことに気づいた。

○「災害用語」が分からないことが多い
・外国人の方は日本での生活が長くても、普段使うことが少ない「災害用語」は漢字が読めない、言葉の意味が分からないことが多い。日常的に「災害用語」を知る機会が必要である。

○体験することの大切さ
・子ども達はクイズやスライドを見るだけでなく体験することで、初めて災害の怖さについて実感していた。このことから、地震や火事だけでなく、スリッパを新聞紙で作ったように他の体験活動もすれば子ども達の理解が深まったのではないかと思った。

6．提案

○防災ワークショップの実施
・外国人の方だけでなく日本人でも災害・防災についての知識が足りてない人が多いと感じた。また外国の子どもは、日本の地形や気候についての知識が少ない。そのため、今回のような防災ワークショップを定期的に行い、日常的に災害について知る機会を設ければよいと思う。

○三木市在住の外国人の方との交流の場を増やす
・日頃から三木市の児童や生徒、学生と三木市在住の外国人の方との交流の場を増やすことで、日本に来たばかりの外国人の方でも地域に溶け込みやすくなると考えた。また地域との交流の場を増やすことで、災害時に日本語が分からない外国人の方を助けることができるなどのメリットも考えられる。

○避難経路、避難場所の確認
・今回の学外活動では、マップアプリを使用し外国人の方が住んでいる場所から入り番近い避難場所の確認をした。しかし、それでは経路の想像がつきにくいという意見もあったため、今後は自分たちの住んでいるところから、避難場所までの経路をマップに載せるなど具体的な工夫をする必要があると感じた。そして、実際にその経路で避難できるのか確認しながら行ってもらうことが重要である。



7．今後につながること

○教育現場で活かせること
・GS を通して外国人の方だけでなく、このような現状から、1 年後教員になり、日本人だけでなくその他の国の子どもにも日本の災害の被害や防災について教育する場を設けたい。そして、子どもやその家族が安心して暮らせるように指導していこうと思った。

○外国の方と交流するときに活かせること
・外国人の方と話すときは「やさしい日本語」を使うことを心がけ、災害が起こった際にはバスツアーや日本語学校での経験を活かして率先して行動する。

○防災訓練で活かせること
・地域での防災訓練があれば積極的に参加したい。また在住外国人の方をはじめとする地域の方々との交流を深め、一人でも多くの人に災害の怖さについて知ってもらい、防災の大切さを実感してもらう。

活動内容

☑［事前学習①］
・プログラム説明
・個人ワークブックを作ろう
・自己紹介
☑［事前学習②］
・現状の課題を知る①
・現状の課題を知る②
☑［事前学習③］
・現地学習の準備
・バスツアーチラシ作り
☑［学外活動①］
・外国人（大人）のための日本語教室見学・参加
☑ワークの準備
☑［学外活動②］
・外国人のための日本語教室の見学（大人）
☑［学外活動③］
・外国人（子供）のための日本語教室に参加
☑振り返り・後半のためのグループワーク
☑［学外活動④］
・自由が丘連合自主防災訓練に参加



☑振り返り・後半のためのグループワーク
☑［学外活動⑤］
・防災バスツアー
☑［事後学習］
・GW 発表・個人最終レポート作成
・学内報告用ポスター&プレゼン資料作成

GLOBAL STUDY
in Western Sydney University, Australia



プログラムの目的

学生のスタートアップを支援している Western Sydney University（WSU）において、
西シドニー市における様々なスタータアップ企業の取り組みを学び、
また、自らで起業アイデアを企画し、プレゼンを行うことで、
英語力やビジネスにおける実践力、多様性理解を図る。
滞在時前半は、様々な分野、具体的には、農業、医療、教育分野のスタートアップの事例や
当該分野が抱える課題等について、実際の起業家やそのサポートを行なっている団体を訪れ、情報収集。
これらの情報をもとに、後半は、特にビジネス分野におけるピッチのポイントを学んだ上で、
自らが考える現代社会の問題と、その解決策を提供するビジネスを考え出し、
その内容についてピッチを行う準備を行なった。

Highlights

| 02 Mar

WSU 提携の中高女子校と
WSU Hawkesburyキャンパス訪問

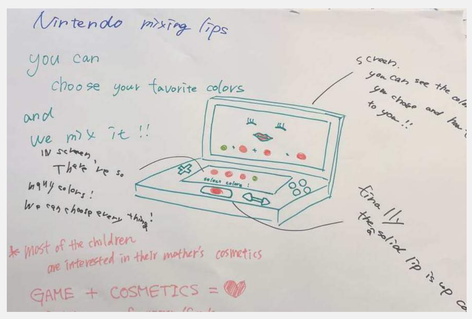


高校生の頃から起業家精神を育むため、WSUと提携。「女性でも起業可能」というマインドセット育成のため、様々な企業アイデアのコンテストを学内で実施している。
Hawkesbury キャンパスでは農業分野において、AI を用いた作物の成長管理やドローンによる受粉、成長に有益な光のみを通すファイバーを使ったビニールハウスなどを見学。

| 07 Mar

Sydney School of Entrepreneurship と
University of Technology Sydney へ訪問、
プロトタイピングについて学習





プロトタイプ化とは、スケッチなどを用いて頭の中のイメージを視覚的に表現すること→ビジネスの本質を見えやすくする。2 つの全く関連のない製品を組み合わせから新しいものを作るワークを行い、右の写真のような製品アイデアを出し合った。
Start up 関連施設には、ユニークな建物が多く、自由な発想を大事にすることで、起業家精神が自然と身についていくのかなと感じた。

| 03 Mar

WSU Kingswood キャンパスへ訪問
Emerging technologies や Bio-medical tech industry
について学習、Launch Pad キーホルダー作成







生成 AI やメタバースのような新しいテクノロジーを活用し、どのように SDGs などの大きな問題へ取り組めるかが今後の課題。医療・バイオ産業においては、超高齢化社会になる日本にとって重要な分野であり、ユニコーン企業などに投資をすることで成長への底上げを図ることができ、今後注目すべき産業であると感じた。

| 04 Mar

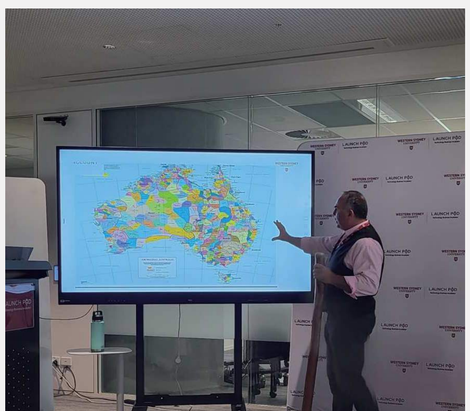
シドニー ダーリングハーバーから
クルーズ船で周遊と観光



シドニー湾の豪華なクルーズ。地震の少ないシドニーでは、富裕層は海岸線に集まるということで、高級住宅やアミューズメントパークが湾に集中。

| 06 Mar

Storytelling を含めた効果的な
pitch の方法、ビジネスアイデアを
企画する方法の学習



「Not what to say but how to say」
会話の情報は、3 割は内容から、残りの 7 割は伝え方から得るものである。そのため、発表の内容だけでなく発表の伝え方にも工夫し、練習することが必要であった。言葉だけでなく表情や姿勢そして、何より活力を持って伝えることを意識した。

| 08 Mar

Pitch preparation
& practice session と、
Sydney Zoo へ訪問



Session の中では、プレゼンのポイントについて学習した。90% がアイデアや内容、
10% が Pitch 方法や伝え方だと思われがちだが、どちらとも 50% ずつの要素を持っている。
それを意識することで、Pitch の仕組みを理解し、良いプレゼンターになる自信を得た。

| 10 Mar

最終 Pitch (WSU Parramatta
キャンパス）と Farewell Party



Pitch では、社会問題への解決のためのビジネスアイデアを企画し、これまで学習した内容を基に英語で発表を行った。2 分半〜 3 分間という短い時間に、で自分たちのアイデアをオーディエンスにいかに印象づけながら、pitch を行うか、に焦点を当てた。PPT スライドの見やすさ、要点のみを話す、などは当然の如く、さらに story を語ることが、Pitch では最も重要である。

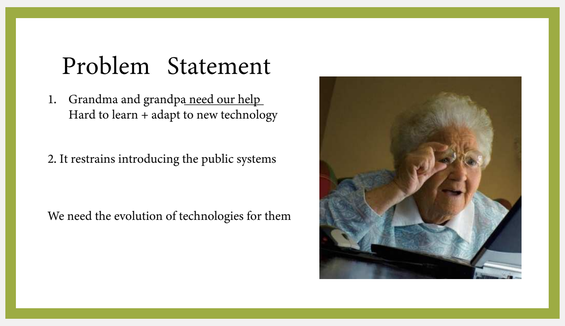
Group 1 Beloved EV

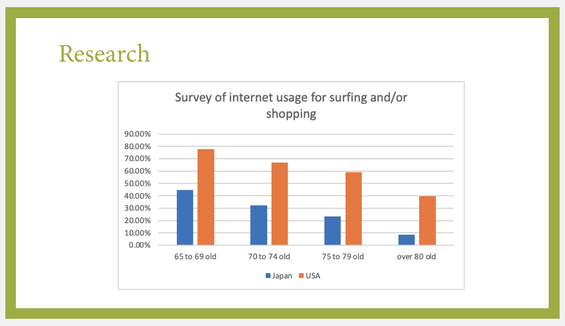


Our car business “beloved EV” can provide an enjoyable experience for customers.
The Japanese government plans to ban petrol car selling in 2035, but today, it’ s less than 1 % who choose EV car.
One of the reasons is that many customers recognize their own car as loved car.
Our “beloved EV” is a car selling shop to offer loved car by customizing.
Customers can customize exterior, interior design, sounds, vibrations, and so on by using VR glasses in showroom.
Our business can provide driving experience into loved EV car and contribute to growing the number of EV car.

Final pitch

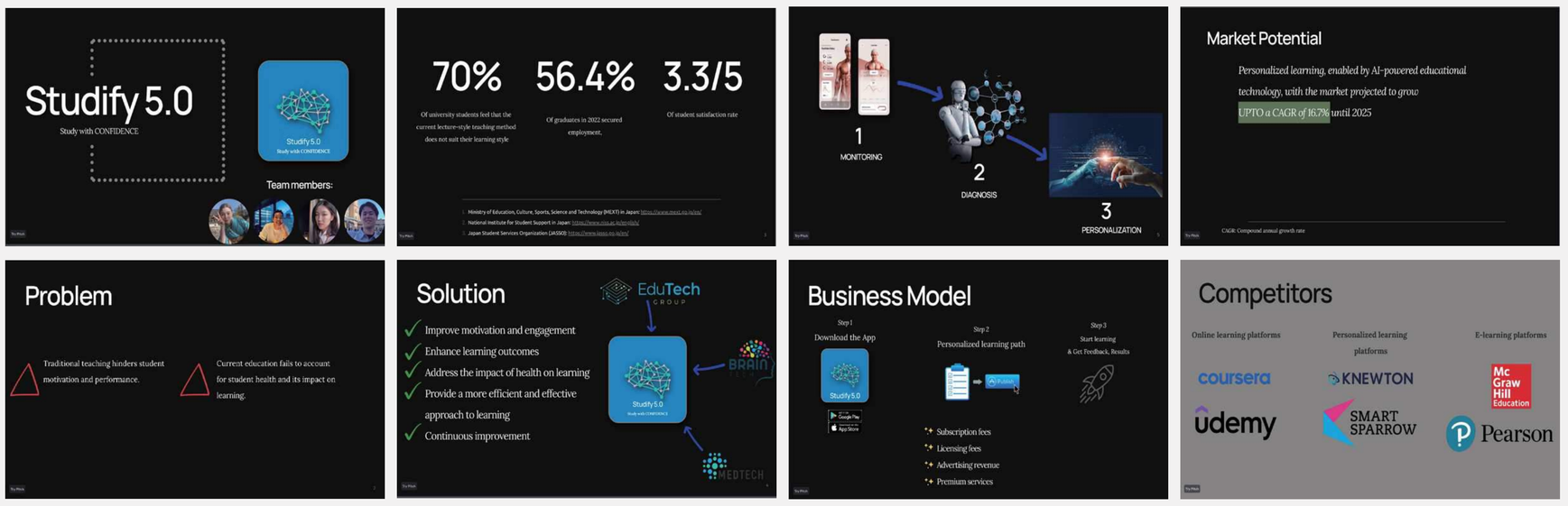
Group 2 Metaverse Classroom





Our virtual platform “Metaverse Classroom” can increase more opportunities to learn about the use of developed technologies for elderly people.
Grandma and grandpa need our help because they are hard to learn and adapt to new technologies. This problem restrains introducing the public systems.
Our “Metaverse Classroom” can exercise all bodily senses to learn, do things like in the real world without swiping and typing,
and response any questions from personal AI or human support anytime.
In terms of the information gap, “Metaverse Classroom” revolutionize the way adapt for incoming societal aging peak in 2042,
digital degradation cliff, and further economic stagnation.

Group 3 Studify 5.0



Our educational app “Studify5.0” can revolutionize the way students learn.
Traditional teaching methods hinder student’ s motivation and performance, while neglecting student health and its impact on learning.
“Studify5.0” can personalize education through health monitoring and tailored knowledge delivery.
Our AI integrates with devices like smartwatches to track physical and mental health indicators, which providing the best knowledge based on the user’ s condition.
Over time, the AI becomes more sophisticated, and offering increasingly personalized recommendations.
“Studify5.0” can enhance academic performance, and engagement in learning experiences overall.

世界展開力強化事業（神戸プログラム）活動報告

Venture Makers Program を基に ”起業家“ マインド を育成する

経営学部 経営学科　２年 6223050　氏名 川野　大地

1. 世界展開力強化事業とは？

大学の**世界展開力強化事業**とは、世界で活躍する優れた人材育成の強化を図る「国際的に誇れる大学教育システム構築等の支援制度」です。採択校には、日本の大学のグローバル展開力強化への貢献が期待されています。**関西国際大学**は、2022年度**「大学の世界展開力強化事業」**に、関西の私立大学の代表校として唯一採択されました。

2. 神戸プログラムとは？

5ヶ国の国の方が参加し、”アンカー神戸”や ”三宮コンベンションセンター”を基点に最終日の**「国際起業家会議」**での発表に向け、様々な企業へ訪問し、知識や見識を深めた上でグループワークを行い、チームで一つのビジネスプランを作成し発表しました。

1 オーストラリア
1コンソーシアム
2 カナダ
3 インド
4 イギリス

3. 神戸プログラムの概要

	3/14	3/15	3/16	3/17	3/18	3/19	3/20	3/21	3/22	3/23	3/24
AM	Welcome Event Introduction	Introduction of startup ecosystem	Daily Check	Daily Check	Weekend Free Time	Weekend Free Time	Daily check Event Hydrogen	PASONA	Global Government	Pitch mentoring	Global Conference Day
PM	Multi-Cultural Communication	Kobe Biomedical Innovation Center	Group Work	Group Work	Weekend Free Time	Weekend Free Time		PASONA	Group work	Group work	Reception Party

4. 印象的な活動

Day7の淡路島での**”PASONA”**の企業訪問はとても印象に残っています。PASONAは様々な事業に参画しています。特に農業分野に興味を持ちました。淡路島産にこだわり、その野菜をメインとした料理を目の前で農家レストランとして提供しています。作物を育てるための肥料にもこの淡路島で採れた野菜や魚が使われていました。

5. 作成したビジネスプラン

私たちのグループでは、言語の壁を無くすために**「翻訳や通訳に特化したアプリやシステム開発」**を提案しました。この内容になった理由も、グループワークを行っている時に説明がうまく伝わらず、言語の壁を感じたからです。しかしAIによるシステムが発達している今、自分たちが提案したものに近いものはできてきているために、その部分の難しさや課題は感じました。

6. 国際起業家会議

最終日3/24に**「国際起業家会議」**が開催されました。各グループが作成したビジネスプランを発表し、先生方から評価をいただきました。各グループともユニークな内容の発表で聞いていて面白かったです。この国際起業家会議では音声通訳を現地でやってくださって、それを機械で聞くことができるので、他の言語がわからなくても、自分の国の言語で分かりやすく聞くことができました。

7. 本プログラムでの学び

約10日間のプログラムを通して、コミュニケーションをとるツールは言語だけではないことを強く感じました。自分自身は参加者の中では全然英語ができなくて、苦労する部分が非常に多かったですが、外国の方とコミュニケーションをとる場面において、表情やジェスチャーでも様々なコミュニケーションをとることができるのだなと感じました。

世界展開力
神戸プログラム

活動の事例





初日は神戸や
元町を散策
しました。

ウェルカム
パーティ
の様子。



大使館の方のお話
をお聴きしました。



国際起業家会議に向けて

本番に向けて
最終調整中。



「国際起業家会議」動画紹介

【大学HP】

【YouTube】

発表中。



無事発表
終了しました。

